



る「構造改革」を進めるのに適合的な政治制度にするために、首相のリーダーシップの強化や、参議院の権限縮小、地方分権、道州制の導入が考えられており、主として憲法で統治機構を定めた部分を改正する必要が出てきたことだ。

#### □前面に押し出された「軍事大国化」

自民党案で前面に押し出されたのは、「構造改革」推進路線ではなく、日本の「軍事大国化」のための改憲だった。しかも、公明党ついで民主党とも合意しなければ改憲案を発議するために必要な「各議院の総議員の3分の2以上の賛成」（憲法96条）を得られないため、議論の多い「復古」的内容——天皇や伝統・文化の強調；愛国心の明確化；家族尊重など——は全面的に見送られたり、薄められたりした。あえて復古色を抑え、参議院の権限縮小なども控えたところに、自民党の改憲への意気込みと執念が感じられる。

#### □憲法を全面改正せざるを得ない「軍事大国化」路線

重要なことは、自衛隊を「正真正銘の軍隊」に改変すると、結果的に日本国憲法の全面改正とならざるを得ないということだ。小泉首相はよく「自衛隊はだれがみても軍隊だ」と言うが、自衛隊はいまだ軍隊ではない。もし自衛隊がすでに軍隊ならば、憲法改正は必要ないはずだ。およそ軍隊が軍隊として機能するためには、次のような軍隊に不可欠な制度や原理が整っていなければならない——「軍事裁判所」「戦死者の慰霊施設」「軍事機密保護法制」等々。現憲法のもとでは、これらの制度は何ひとつ存在していない。それゆえ、軍隊を維持・運営するために不可欠な制度・原理を整えるために、日本国憲法が全面的に

書き換えられようとしている。自民党案にみられる、日本を再び軍事大国にするための主要な内容は、次のようなものである——軍事裁判所（76条3項）；公的慰霊施設（＝「政教分離」原則の緩和20条3項）；国家緊急権規定（9条の2第3項）；軍事機密保護法（表現・報道の自由を含むあらゆる基本的人権の「公益および公の秩序」による制約12条・13条）；軍事的財政保障（いわゆる「前年度予算執行主義」の復活86条2項）；中央集権化（地方自治特別法の住民投票規定の削除95条）。

#### □他国の市民を殺す決定をする国民投票

改憲案を国民投票に付するための法律（改憲国民投票法案）の作成が国会の改憲調査特別委員会で急がれている。市民運動の中には、「国民投票で勝利して決着をつける」べきであり、「国民投票をやらせないで9条を護る」のは「国家意思を決定するという主権者の最も大切な権利を疎外する」との批判がある（今井一『「憲法9条」国民投票』）。だが改憲国民投票は、日本政府に他国（そして自国）の市民を殺させる権限を「国民主権」の名の下で、多数決でもって付与する手続きにほかならない。なぜなら、「国際社会の平和と安全を確保するために国際的に協調して行われる活動」を行なう自衛軍を創設することは、極東におけるアメリカの武力攻撃の呼び水となり、かつ日本がアメリカとともに軍事力を行使することを可能にするからだ。

ブッシュ大統領がケリー候補を破って再選された直後、米国はイラク・ファルージャを総攻撃し市民を虐殺した（2004年11

月)。ケリー候補はイラク政策の見直し（国連の活用・欧州との対話・イラク人による治安の回復・4年以内の米兵の撤収）を掲げていたから、もしケリー候補が当選していたら、米軍のファルージャ攻撃はなかったかもしれない。米国民による大統領選挙は、事実上イラク市民を虐殺するかどうかの国民投票

の意味を持った。9条2項の削除を核心とする改憲案を決する国民投票も、それと同じ意味を——たとえば北朝鮮市民に対して——持つであろう。だれかを殺す決定を多数決で行なうことなど、してはならないと思う

---

---

## 大島みどり帰国報告会（大阪・京都）

非暴力平和隊（NP）スリランカ第一次派遣メンバー、大島みどりが2年間の活動を終へ帰国したのを期に、各地で帰国報告会が行われています。大阪、京都での様子を報告いたします。

### ①大島みどりさん大阪報告会：報告と感想

参加者 中村 朱里

日本のマスメディアではほとんど報道されることのないスリランカの紛争。しかし、とくに昨年の総選挙以降、情勢が不安定化していることを折に触れ耳にし、とても気になっていました。そんな中、3月30日に大阪で開かれた大島みどりさんの活動報告会に参加しました。

初めに非暴力平和隊(NP)の設立や理念、また活動の独自性についての説明。続いてスリランカの歴史や紛争の背景、非暴力平和隊スリランカ(NPSL)の活動について話がありました。スリランカの面積は北海道より少し小さいぐらいです。その小さな国の中でも地域ごとにシンハラ人、タミル人、ムーア人（イスラム教徒）の人口構成が異なり、また

同じ民族間でも社会的・経済的な背景に大きな差があるそうです。そのため各地域が置かれている政治・経済・社会状況も異なるとのことでした。NPSLの全チームが地元の団体と協力して行っている活動(選挙監視や津波被災者支援)の説明の後、とくにヴァルチェナイ(バティカロア県)とムトゥール(トリンコマリー県)でのチーム別活動が紹介されました。そして、2005年10月時点でのプロジェクトの状況と今後の課題について報告されました。また、参加者からの質問を受けて、派遣前のトレーニングの内容が紹介されました。

今回の報告会に参加して何より良かったのは、紛争地域での非暴力介入の実践を一般

論としてではなく、フィールド・チーム・メンバーの生の経験として聞いたことです。具体的には、ヒンズー寺院の祭りで、LTTE が子どもを誘拐、勧誘するのを防ぐための夜のパトロールや LTTE に少年兵、少女兵として子どもを誘拐・リクルートされた親への支援（LTTE 事務所へ同行）、また、イスラム教徒グループとタミル人漁民の間で起こった金銭問題の対話促進などについての話がありました。

NP の今後の課題として活動の評価基準と方法を挙げられていました。NP の活動成果は単純に数値化して評価できるものではない。活動地域で暴力が起こらなければ、国際社会に注目されないし、NP の存在や活動によって暴力が起きなかったのか、それとも元々何も起こらないはずだったのか、という評価も難しい。私は、NPSL の活動内容を「情報」として断片的にですが知っていました。しかし、他の NGO のように、例えば地雷をいくつ除去した、というような形の見えやすい活動ではないので、今までなんとなくぼんやりとしたイメージしか持っていなかったのかもしれない。活動全体の評価は困難であったとしても、一つ一つの事例、例えば子どもを少年兵として取られた親にとって、NP のメンバーの存在は大きな意味を持つのでしょうか。それは暴力の抑止だけにとどまらず、暴力と常に表裏一体の「恐怖心」に対する働きかけでもあると思いました。もう一つ興味深かったのは、活動地域の住民との信頼関係についてです。地元の人から活動に対する理解や信頼を得るには時間もかかる

し、工夫も必要要だろろうと思います。時間があれば事務所の外に出て、NPSL のことを地元の人に知ってもらおう。困ったことがあればいつでも事務所を訪ねてください、電話してくださいと呼びかける。そして事務所のドアをできるだけ開けたままにしておく、など地道な毎日の積み重ねの大切さを知りました。平和デモやマーチ、単発的な短期プロジェクトという形態ではなく、数年以上同じ地域に関わるからこそ、信頼関係はとくに必要であり、またそれを築くことも可能になってくるのだろろうと感じました。また、NP の「中立性」は信関係を築く要だと思いました。ただし、マータラのシンハラ人コミュニティでの活動が難しかったということなどから、何を「中立」の基準とするかは様々で、それを実践するのは複雑なのだろろうと考えさせられました。

今回の報告会に参加して、非暴力についてもっと学んでいきたい、自分自身の生活にも取り入れていきたいと改めて思いました。続けて、今後の NP の活動にも注目していきたいと思います。

※※※「憲法 9 条を活かす NGO にまなぶ <もうひとつの世界は可能だ> 第 5 回学習会」 主催：WSF おおさか 呼びかけ人：藤永のぶよ（おおさか市民ネットワーク）／梅田章二（弁護士）／西谷文和（イラクの子どもを救う会） 時 06 年 3 月 31 日（金）午後 6:30 から場所 エル大阪 5 階研修室 2 にて行われました。（編集部注） ※※※

## ②京都での大島みどりさん——4月1日の講演会をきいて——

池田早葉（立命館大学国際関係学部4回生、NPJ学生会員）

私は大島さんと3月はじめに東京で一度お会いしたことがあります。スリランカで熱心に活動している方なら、強くて厳しい印象の人なのだろうと、勝手に想像して緊張していた私は、大島さんの、その腰の低さと品の良さに少し拍子抜けしてしまいました。

講演会は実際の開始時間まで、ユンカーマン監督の「映画・日本国憲法」を上映していました。講演会に来るような人なら既に見たことがあるのではないかなと思う一方で、そのような細かい演出が一人ひとりの意識を変えていくのだろうし、上映して正解だったと思います。ちょうど、「憲法を生かさなきゃ」と盛り上がった頃に大島さんの講演が始まりましたから、見事なタイミングでした。

講演は非暴力平和隊の活動理念の説明に始まり、実際の大島さんの活動体験へと進みました。「護衛的同行」などと聞くと、とてもマッシュョなイメージを持ちがちです。しかし非暴力、つまり話し合いや相互理解によって問題を解決へと導くのが、大島さんのように優しい印象の人でないと威嚇になってしまう、非暴力平和隊の理念は成立しないのだと理解しました。

非暴力平和隊が事務所を置くスリランカの各地方の社会的状況などを聞いていると、映画「ホテル・ルワンダ」や「イノセントボイス」のシーンが次々と頭に浮び上がってきました。国や政治状況は違っても、市民の置かれている不安定で暴力と背中合わせの生活は同じだと思います。そして、そういう状況になっているのは、決してその国が特有の

問題や欠点を抱えているからではなく、世界的視野でみた権力や富の不均衡など、政治的・経済的な格差の構造が、そのような現実をグローバル・サウスにもたらしているのだと思います。

北の住民として、ある程度平穏に生活する私たちは、紛争地域で暴力的な事件が起こっても、「何もしてあげられない非力」をただ悔やむだけです。私達の想像力が、私達の生活様式と、南の状況との因果関係を見出すことは極めて稀です。だから「何かをしてあげたい」と感じるのだと思います。

しかし、南の多くの国が貧困状態やそれに起因する紛争状態にあるのは、私達の生活様式の歴史的発展にその多くを負っています。私達の無関心が、適切な援助をもとめる声を聞き逃し、私達の無知が、紛争勃発を抑止するための積極的努力を空洞化してしまったのでしょう。

「何もできない」とか「何かしてあげたい」ではなくて、非暴力平和隊は、現地の要請があった場合に限りませんが、現地の紛争——それは北に住む私達が原因で生じたものかもしれません——を抑止するために活動し、さまざまなNGOとの連携を通じて世界に私達の問題を提起しているのかなと思いました。

大島さんは、非暴力平和隊の活動の成果は見えにくいとおっしゃっていました。武力紛争が起きれば失敗だったと判断できるでしょう。しかし、何も起きなければ、それは非暴力平和隊の活動成果によるものな

のか、その他の理由によるものなのかが明確に判断できないからだそうです。なんだか、健康を保つためにバランスを考えて投入されるビタミン剤のような NGO だなど、非暴力平和隊がちょっと可愛く思えました。しかし、活動成果が見えにくいという事は、それだけ活動を人に理解してもらう事が難しいだろうし、なおさら講演活動を今後活発にする必要があると思いました。

大島さんの講演のあと、君島先生と田中正先生のおふたりが参加してのシンポジウムへと移りました。君島先生は憲法学者の立場から、いかに日本国憲法が非暴力平和主義の理念に基づくものであり、活かすべき要素に恵まれているのかを熱心に話してくださいました。論理的で丁寧な解説に皆、熱心にメモを取っていました。また、君島先生は、A. ネグリと M. ハートによる『マルチチュード』（日本放送出版協会）と言う本を紹介してくださいました。現在という時代の全体像を把握し、その時代に生きる個人として自分の行動を考えるのに決定的に重要な書物であることが伝わってきました。有名な本だし、読もうと思いつながら、いまひとつ手を出せずにいた私ですが、講演会から帰ってさっそく読み始めました。

田中正先生は、科学者の立場から原子爆弾と人類の共存は不可能であることを湯川秀樹博士の論文をもとに説いてくださいました。人文系の学部にいる私をはじめ、平和運動にかかわる人々の多くにとって、博士のような存在は大きな力になります。核の廃絶を訴えるのに必要不可欠な原子力に関する科

学的で確かな知識を、私たち人文系の学生も、積極的に吸収するべきであると実感しました。

最後に、今回講演会に参加して、人集めの難しさを改めて感じました。人の集まり自体は良かったと思います。問題は、ほとんどの人がお互いに顔見知りだったということです。講演会に来る人はもともと非暴力平和主義や NGO に関心のある人で、話も熱心に聞いてくれます。しかし、興味がなかったり、非暴力平和主義に賛成しない人は、わざわざ講演会に足を運ぶことをしないでしょ。今のままでは、極端に悪い言い方をすれば、内輪のある決定的な解決策を提案する力はありません。しかし、もう少し熱心に広報活動をするにはできると思いました。今の私にできることは、学内でたくさんの学生に参加したいと思わせるような講演会を開くこと、同じ年代の若者が集まるカフェやクラブなどにもリーフレットなどを置かせてもらうこと、そして高校や他大学に講演を依頼することだと思います。学生生活はあと 1 年少しですが、その間にできるだけ非暴力平和隊の知名度が上がるように努力したいと思いました。

日時：4月1日（土）13時会場、14時開始  
会場：ひとまち交流館 第4会議室  
（京都府京都市）  
主催；平和友の会、反核ネット京都  
▲上記日時で開催されました（編集部注）

### ③関西パワーと女性パワー

元 NP スリランカプロジェクト フィールド・チーム・メンバー 大島 みどり

3月31日(金)大阪で、4月1日(土)京都で、わたしの2年間のNPスリランカ・プロジェクトの活動報告をさせていただいた。会の内容や会場の様子などについては、客観的な報告を書いてくださる方にお任せして、ひとことだけ感想を書かせていただくことにした。

それは「関西パワーの力強さ」に尽きる。大阪は世界社会フォーラムおおさかの主催だったが(京都市は別報告を参照してください)、懇親会に集まってくださった20名弱のほとんどは女性だった!京都でも司会は桜柄の帯を締めた女性で、関西パワーと女性パワーが全開(季節柄「満開」)!このパワーをどう東京・関東に移植するか、これがわたしの課題である。活動盛りの女性は往々に

して、仕事、家事、育児、そして時には家族の介護なども加わり、地域/社会問題への関与はしたくてもできない社会と現状が、まだ歴然としてある。が、そんな環境の中だからこそ、NPO/NGO活動や地域・社会問題に取り組む彼女らの姿は、たくましく晴れがましい。「わたしがやるんだ」という熱意と、ちょっとやそつとの困難にめげない堂々とした姿勢。わたしは、日本と世界がそんな女性たちで溢れる日を、そして(容姿ではなく)パワーと知識・能力を備えた女性たちをすばらしいと認め、応援する男性たちがちまたに溢れる日を夢見ている。いや、夢だけでは終わらせない。東京・関東、日本各地、関西に続け!

---

---

## NP 韓国訪問記 - 韓国では「北」との平和的統一を目指していますよ - - -

小林 善樹

30年ぶりに韓国を訪れて来た。かねがね独立記念館を訪れたいものと思っていたのだが、今回韓国の「非暴力平和の波」(韓国語では「隊」という言葉を使わずに「非暴力平和の波」という名称を使っている。英語ではNonviolentPeaceforce Coreaとなっている)との交流を始めるための話し合いに参加

するという機会に恵まれ、その後で独立記念館、統一展望台、パゴダ公園を訪れた次第。持って行ったガイドブックは(1)「観光コースでない韓国」(小林慶二著、高文研)(2)「旅行ガイドにないアジアを歩く - 韓国」(君島和彦・坂井俊樹・チョン・ゼジョン共著、梨の木社)(3)「地球の歩き方 韓国」

の3冊。

私はかつては企業に忠実な会社人間であったが、30数年前に韓国企業との合弁で造船所を建設する計画にたずさわったことがある。その際に韓国語やハングル文字を独習したのだが、日韓の歴史問題も勉強してそれ以来関心を持って来た。そして、朝鮮半島の南北の分断は日本の責任だった、との認識を持っている。だから、日本は南北の平和的統一を押し進めていくような姿勢をとるべきではないか、とっていた。歴史にイフはないというが、1945年8月9日のソ連軍侵攻開始以前に敗戦を受け入れていれば、南北の分断はなかったし、開拓民の苦難も残留孤児の発生もなかったはず。もしそうであったならば、朝鮮半島の政治体制がどのような推移をたどったろうか、というのも歴史のイフではあるが、分断ではなかったであろう、と考えているからだ。

1. まず初めに報告したいのは統一展望台の話。東海岸には以前から北側を望む展望台があったが、ソウルから近いところに欲しいとの要望により1992年に西側に作られ、1年間で160万人が訪れたという。ツアーもあるようだが、今はシーズンオフらしい。

ソウルから北へ京義線で約1時間、金村(クムチョン)という駅でおりて車で約10分のところにあるオドーサンという小山の頂上に設けられている。ここはイムジン河と漢江の合流点に面しており、この二つの河が南と北を隔てる境界になっている。望遠鏡がズラリと並んでおり、3.2km離れた対岸の北側を望見できる、というので出かけたのだが、残念ながらその日は霞か霧のためかす

んでいて良く見えなかった。とにかくソウルから約40kmで軍事境界線なんだ、という近さを実感した。40kmという距離感は、東京駅と成田空港の間が約55km、大阪駅と京都駅の間が約45kmだということから類推できるだろう。こんな近さでは、「共に生きる」しか選択の余地はないんだ、と考えざるをえないだろうと思う。

統一展望台の中には「統一念願室」があり、金大中元大統領の揮毫などが飾られていたが、修学旅行で訪れた日本の高校生の作品も飾られていた。

3月3日の朝日新聞に「モノづくり南北接近」と題して「軍事境界線から10数キロメートル北側の開城(ケソン)の工業団地で、韓国企業11社が約6千人の北側住民を雇用し、韓国人約500人が韓国側から毎日通勤している。将来的には2千社を越える大工業団地を目指している」というような取材記事が載っていたことを読まれた方もあろうかと思うが、私たちが毎月読書会をやっている雑誌「軍縮問題資料」4月号にも川上徹氏という方が「非武装地帯で見たことー想像との落差」と題して、現地の状況は、日本国内で流布されている「北朝鮮の脅威」とはまったく違って、平和的統一を目指していることを感じた、と書かれている。そしてケソンを訪れて来たという韓国人ボランティアが、この工業団地のことを説明してくれたことが書かれている。この工業団地のことは初耳だった。

中国本土では多くの台湾企業が事業を展開しており、春節の里帰りで航空会社が直航の臨時便を飛ばしている話は聞いていた。政府とは別の次元で経済的に結びついた交流



が進んでおり、民間では共生の機運が高まっていて、中台間の紛争を緩和する方向につながっていると理解していたが、朝鮮半島でも同じような取り組みが始まっていることを知って、この動きが南北の平和的統一を進めていくことにつながることを願って止まない。

統一展望台の中には、北側からの輸入品販売店があったが、その一部に、ケソンの工業団地で作られた製品が誇らしげに展示されていた。鍋釜などの家庭用金属製品やプラスチック成形品のおもちゃだった。靴類には気がつかなかった。

この日は京義線という鉄道に乗って往復したのだが、線路脇では線路工事が続けられていた。いずれ北側に列車が走り始めることを見越して、改修工事か複線化工事が進められているものと思われた。京義線とは、ソウルから北側の中国との国境新義州までを結ぶ路線だ。その先は中国とつながっており、今現在は中国と北側を結ぶ幹線で、中国との輸出入（北側は鉱物資源が豊富）の主要幹線であり、盛んに交易がおこなわれていることが雑誌「軍縮問題資料」で伝えられていた。たとえ日本が経済封鎖などという愚かなことをやってみても大した効果は期待できないほどらしい。「[ワンコリア]風雲録」という本でも、南北間の線路そのものは2003年にすでに接続済みだと書かれている。今は1時間に1本のローカル線といったところだが、いつの日にか北側と結ぶ大動脈になるものと思われる。

なお、「[ワンコリア]風雲録」（チョン・カプス著 岩波ブックレット）という本は、20年前にワンコリア・フェスティバルを細々と

始めた著者が語るこれまでの略史で、今や滔々たる流れに発展したワンコリア運動についての経緯が書かれている。今回帰国後読み直して改めて感銘を受けた。一読の価値あり、とお奨めしたい。とにかく韓国では、平和的統一を目指す動きが着々と進んでいるんだということを実感した。独立記念館でも統一旗（オリンピックなどでご承知の旗）が並んでいた。

日本国内で、拉致問題を言い募り、あたかも脅威があるかのように煽っているのは、有事法制ほか一連の軍国化を進めて来た軍産共同体・右翼政治家たちだと理解しており、社会の木鐸たるべきジャーナリズムが、その使命を忘れて迎合している、と考えている。私は昨年末に、北側との国交回復こそが最優先課題であって、拉致問題はそのあとに話し合うべき課題の中のひとつに過ぎないのじゃないか、との意見を朝日新聞「声」欄に送ったのだが、ボツになってしまった。メディアでは、国交回復を優先すべしという論調がいっさい排除されているように思われる。

ここで思い出すのは、雑誌「軍縮問題資料」の昨年11月号に軍事評論家の前田哲勇さんが紹介してくれた6年前のドイツ元大統領ワイツゼッカー氏の言葉だ。それは「ドイツは、歴史上初めて、隣国がすべて友人であるという状態を迎えた。では、何のために軍隊が必要なのだろうか？ 軍隊は、ますます時代遅れになりつつある」という言葉だ。まわりの国々がすべて友好国になってしまえば軍隊なんか不要だ、と言えよう。政府がなんと言おうと民間がどしどし友好を深めていって、「もし攻められたら」などという心配をしなくてもよい隣国関係を作り上げるよ

うな方策がないものか、と思案している。

2. 独立記念館は、ソウルから南約 100 キロメートルにある天安市郊外にある。日本の教科書問題に端を発して民間からの募金によって 1987 年に完成した広大な記念館だ。実に広くて体調不良だった私は休み休み回らざるを得なかった。民族伝統館、近代民族運動館、日帝侵略館、3. 1 運動館、独立戦争館、臨時政府館、大韓民国館と七つの展示館があるが、最後を除いて六つを見て来た。独立記念館については、ガイドブック(1)では 31 頁、(2)では 6 頁を費やして紹介しているので、訪れる機会のない方にもガイドブック(1)はお奨めかと思う。

日本人はほとんど訪れないと聞いていたが、修学旅行の一团に出会った。先生にお尋ねしたら静岡県磐田の文化専門学校とのこと。お珍しいですね、と聞いたら「今は修学旅行コースに入っているようですよ」とのお返事だった。日韓の問題に関心を持ってくれるきっかけになってくれればいいな、と思った。

天安(チョナン)まで特急ムグンファ号で約 1 時間、すぐそばに米軍再編に絡んで基地移転問題で緊張が続いていることが伝えられている平澤(ピョンタク)があったのだが、列車の中からではそのような緊張状態はうかがえなかった。

(1) 民族伝統館は、古代から李朝時代まで、秀吉の侵略を除けば日本との関係がおおむねよかった時代までの歴史を展示してあった。(2) 近代民族運動館は、1876 年の江華島条約から甲午農民戦争を経て、日清戦争、日露戦争、第二次日韓条約、伊藤博文の暗殺ま

で、日韓併合に先立って日本が朝鮮半島の支配を強めていった歴史が展示されていた。

(3) 次はこの記念館のハイライトとも言える日帝侵略館、日本官憲がおこなった拷問を示す蠟人形 5 例、日本人はなんとひどい残虐なことをやったことか、とただただあきれ、日本人として申し訳ない想いをいっそう深めてきた。(4) 3. 1 運動館、結果的に全国の 40% もの農地を収奪してしまった土地調査令の強行など日本による差別、圧迫に対する抵抗運動としての独立宣言と民衆蜂起、その後の融和政策、日本語の強制、創氏改名、強制的労働者連行の歴史が示されていた。5) 独立戦争館、1910 年あたりから 1945 年の解放(光復)まで朝鮮半島各地や中国側間島で繰り広げられた日本に対する抵抗の歴史が展示されている。韓国の歴史についてはそれなりに知っているつもりだったが、この独立戦争館の展示は知らない事実が多数展示されていて教えられるところが多かった。(6) 臨時政府館、1919 年中国の上海で大韓民国臨時政府(亡命政権)が設立されており、その後重慶に移って 1940 年には重慶で韓国光復軍が創設され、41 年 12 月には日本に対して宣戦布告を發したという。亡命政権があったことは知っていたが、軍隊を編成して日本軍と戦った、ということは知らなかった。

3. 1919 年 3 月 1 日「サムイルデイ」の独立宣言の地として有名な「パゴダ公園」訪れて来た。入り口の広場には独立宣言文を刻んだ大きな記念碑と銅像があり、奥のほうには、この公園での宣言に端を発して全国各地でおこなわれた独立万歳運動とそれを弾圧した日本官憲のレリーフ 10 枚と説明文が

並んでいる。ガイドブック（1）では9頁、（2）では6頁を費やしてレリーフの内容が紹介されている。

4. なお、ソウルの景福宮の最奥部にあって、1895年当時の日本公使がお膳立てし、日本

軍人を含む暴徒が王宮深く侵入して皇后ミン妃を虐殺し焼き捨てた現場付近に建っている「明成皇后（ミン妃）殉国崇墓碑」をお参りしたかったのだが、手前のお宮が工事中のため6月まで通行禁止になっていてお参りできなかったことは残念だった。

---

---

## 「非暴力平和の波」（非暴力平和隊・韓国）のリーフレット

君島東彦共同代表・奥本京子理事・小林善樹理事らが、3月7日に非暴力平和隊・韓国のオフィスを訪ね交流をしてきました。ここに、非暴力平和隊・韓国のリーフレットを抜粋して紹介します。《原文の翻訳は会員の金恵玉さん（立命館大学大学院社会学研究科博士課程院生）です》非暴力平和隊・韓国のハンゲル名は、「非暴力平和の波」で英語名は、Nonviolent Peaceforce Corea（NPC）です。Coreaの表記は意識的に「K」ではなく「C」にしているそうです。

非暴力平和の波は、非暴力の方法、非暴力の力で朝鮮半島の平和を守り、  
世界平和を達成するために努力します。

平和と人権、友情と和解のもとに命を生かす正義な社会を求めます。

### NPCの活動

- ・ **動く平和学校**——平和問題に悩む小グループや団体がある所であれば、全国どちらでも訪ねて非暴力平和の考え方と生きることを分かち合う小さい平和学校。
- ・ **平和の広場**——毎月一回開く平和の語り場（しゃべり場）。専門家とともに話し合う深みのある対話は、平和の感受性を悟らせ、「平和な世の中作り」に参加する手引きを与えます。

- ・ **ハンガンの河口の平和フェスティバル**——停戦以後50年間、鉄線に閉じこめられ「政治的湖」になったハンガンの河口に「平和の船」を浮かべます。1953年停戦協定に「ハンガンの河口水域は双方の民間船舶の航海にここを解放する」となっており、国連司令部の管理権もない。南北の知恵と合意だけで「平和の海」をつくることのできるこの場所で、平和の波を引き起こしましょう。

- ・ 平和の歩きと瞑想・DMZ(非武装地帯)の平和紀行——平和のこころと美学を養

うために民統線を訪ね、平和紀行と月明かりの夜を歩き瞑想します。

【編集部注】

・ DMZ---demilitarized zone の略。非武装地帯。1953年の休戦協定で軍事分界線が決められたが、その分界線から片側2キロメートル、合計4キロメートルの幅の非武装地帯が設けられた。

・ 民統線---民間人出入統制線の略称。韓国側では非武装地帯のさらに南側に民間人出入統制線を設け、一般人の無許可進入を禁止している。

- ・ 平和音楽教室——朴ソンスンさん（音楽家、suggestopedy 音楽教授法の創案者）とともにわれわれの心に深く眠っている音の種を早めに起こす平和な音楽教室です。
- ・ 平和英語教室——英語に気おくれしないで、やさしい英語で話せるように助ける朴ソンジョンさんの平和な教授法によるStorytelling と平和エッセイの講読など。

平和研究と平和行動

- ・ 非暴力平和思想の研究
- ・ 平和監視活動——戦争の徴候を早期に発見し、平和を守る「平和モニタリング」

を行います。

- ・ 葛藤・紛争の非暴力的解決方法のワークショップ
- ・ 平和写真の作家である「李 シウさん」とともに国連司(国連軍司令部)再調整キャンペーン

「非暴力平和の波」は、国際 NP のメンバー団体として参加する平和活動と、朝鮮半島の状況にふさわしい固有の方法の非暴力平和運動を展開します。

「非暴力平和の波」は「薄緑平和の波として朝鮮半島を包みましょう」と提案します。

※非暴力平和隊・韓国事務所での風景。



## ブラッドフォード大学体験記 2

修士課程 平和学専攻 中原 隆伸

私がイギリス北部の町、ブラッドフォードに留学して、半年以上経ちました。留学期間は一年なので、早くも半分以上終わったことになります。1月末から始まった2学期目もすでに終わりが近づき、授業自体は5月中旬まででその後は卒論を残すのみになりました。今回は、前回書いたことも踏まえてこの大学院のプログラム、及びこの町での生活についてお伝えしようと思います。

まず、町について。なんといってもブラッドフォードの特徴は天気とパキスタン人です。多分パキスタンの首都のイスラマバードはこんな感じなのかな、と思うくらい周りはパキスタン系の人ばかり。大学にいるから余計そう思うのかもしれませんが、とにかく多いです。特に隣のブラッドフォード・カレッジの学生は余計そうで、9割以上パキスタン系の学生さんという感じがします。グローバリゼーションの威力をまざまざと思い知った感じです。今生活しているKirkstone Hallという寮にもパキスタン系の学生がいて、夜はいつも彼らと一緒に騒いでいます。大学時代も3人部屋の男子寮という、めちゃくちゃな環境下だったので団体生活は慣れっこですが、壁が薄く隣の部屋の音楽がもろに聞こえ、なんとかトランセンディ的な解決方法を見つけねば…といろいろ考えてみましたが、結局図書館で勉強することに落ち着きました。

天気も日本と比べて全然違います。4月になってみぞれが降っては止み、また降っては止み、止んではまた降る…と、もうフツといってくれ！と言いたくなる様な感じです。日照時間も1月は午後4時に暗くなっていたのに、4月上旬にして8時ごろでもまだ明るく、知人によ

ると夏は9時ぐらいまで明るいとの事で感じが狂います。妊婦の方や怪我をしている方等を除き、一年に一度断食する習慣のあるイスラム教徒の方にとっては「夏場に断食が回ってくると大変だろうな」とつい心配してしまいました。(ちなみに、パキスタン系イギリス人が多いため、イスラム教徒がとても多いです。カレー屋さんは、期待していたほど多くなく、そもそも外食する余裕が無いので残り食べ歩いていませんがおいしい所は結構おいしいです)

さて、肝心の勉強について。先学期はかなり理論的というか、「学問」という感じでしたが、今学期は大分応用に力を入れているというか、かなり実践的な内容になってきました。なかでも際立つのは、平和構築のグループ・プロジェクトとスリランカでの2週間にわたる実地研修です。

平和構築グループ・プロジェクトは、武力紛争が鎮静化した(とされる)後の復興開発について、グループごとに一地域を割り当てられて国際NGOの職員になったつもりで復興開発プロジェクトの立案を行うというもので、まず日本人以外の人と(当然英語力やバックグラウンドが違います)3ヶ月半に渡ってグループワークをする面白さがあり、かつかなり実践的な授業なのでやっているととても面白いです。残念な事に、自分のグループは7人の内5人がアメリカ人かイギリス人、もう一人ドイツ人の女性がいて自分、となんだかG7みたいな感じでもっとアジアとか、アフリカとか違うバックグラウンドの人と出来ればもっと面白かったのに…と思いました。こればかりは運の問題で、どーにもなりません。

グループの担当地域はコンゴ民主共和国 (Democratic Republic of Congo) というアフリカ中央部の国で、30年近く続いていた独裁政権が97年に倒されたのですが、その後も隣国のルワンダ・ブルンジ等からの難民が留まっており、ルワンダやウガンダ、アンゴラといった国の反政府勢力も移動してきて国の中が大混乱しています。国の大きさが西ヨーロッパ全体と同じくらいで、いろいろなグループの間で戦闘が続き、ここ数年間で400万人が戦争にまつわる原因で亡くなったと言われています。(ナチスドイツによるユダヤ人虐殺は600万人といわれていますが、それと比べての報道の絶大な格差を感じます)

今年中に選挙が予定されており、それを見据えてどのようなプロジェクトを計画すればよいかを考えます。自分の担当は女性に対する暴力の問題で、HIV/AIDSの蔓延もさる事ながら、レイプ被害者に対する偏見、及び女性が畑に行き作物を耕すことが難しくなっているため子供も含めた家族全体の生活に影響が出るなど、地域社会全体に対する影響が出ています。ただ、他にも教育とかいろいろなテーマを各人で決めてリサーチしているのですが、結局は治安及び交通インフラが確保されない限りこういったプロジェクトを行うのは難しく、「鶏が先か、卵が先か」ならぬ「治安が先か、平和構築が先か」というジレンマはなかなか解決するのが難しいだろうな、と考えさせられました。

スリランカの実地研修は、金銭面や自分の専門にしようとしていた分野と違っていた事、また主に「紛争解決学 (Conflict Resolution)」専攻の人向けということもあり、応募しませんでした。ので、どういう状況かわかりませ

んが、この原稿を書いている時点でまだ行っている人たちはスリランカに残っているので、NPのプロジェクトも含め、帰ってきたら話を聞いてみようと思います。

以前平和維持の話が講義であったときにGPPAC (武力紛争予防のためのグローバルパートナーシップ) の話が出てきたのですが、講師も含めて自分が一番詳しい位の状況で、あまりGPPAC、及びNPタイプの非武装の市民を派遣して武力紛争の予防を行う、といった活動は彼らに認知されていないんだなと感じました。学生の関心も平和構築には興味があるけど非暴力には興味はそんなに持っていない、という人が結構多いような感じです。自分は非暴力的介入のみならず平和構築の分野も興味を持っているのでよかったのですが、純粋にNPの理念にそった勉強をしたい、という方であれば少し欲求不満になるかもしれないですね。

課外活動(?)としては、アムネスティ・インターナショナルとか、難民関係の学生団体 (STAR: Student Action for Refugees) にも顔を出しているのと、NPと同じような理念の元活動を行って Peace Brigades International (PBI) の広報ボランティアとして、プレゼンテーションをしたり、メキシコのプロジェクトから帰国しているボランティアに来て頂いてミニ講演会を行ったり、写真の展示会をしたりしました。今、PBIについて学生の新聞に記事を書いていて、トランセンド大学で取ったピース・ジャーナリズムの応用のつもりで頑張っています。

ちなみに、先日当校OGにあらせられる清末愛砂さんの書籍にも出ていたマイケル・ラン

デルさんとお話する機会がありました。NPのプロジェクトについて聞いてみると、NPのTim Wallis (ティム・ウォリス) さんはもともとブラッドフォード大の出身だと教えて頂き、NPにもOBが…と嬉しくなっていました。

そろそろエッセイの締め切りや卒論のアドバ

イザーも決めねばならず、いろいろ忙しい毎日ですが、あとで振り返れば多分懐かしく思うだろうな…と思える位、充実しています。毎日頭の中が「真っ白に燃えつき、灰だけが残る」ような感じですが、残り2ヶ月、頑張って「瞬間、まぶしいほど真っ赤に燃え上がる」ような勢いで勉強しようと思います。

---

## P B I インドネシア レポート

2006年4月13日

PBI ボランティア・スタッフ 藤村陽子



皆様こんにちは。寒かった冬も終わり、桜を満喫されていらしゃる頃でしょうか。私は雨季を乗り越え、今乾季をアチェで迎えました。いつもと同じですが、毎日暑いです。

PBI アチェは3月21日にオフィスを引越しました。1年間住んだ村を離れるのは少し悲しかったですが、今私たちはウレ・カレン(Ulee Kareng) というカフェ(コーヒーを飲む場所)で有名な地域に住んでいます(バンダアチェ市内)。庭にはマンゴー、バナナ、ココナッツなどの木があり、とても静かでいい場所なのでほかのメンバーたちも気に入っています。

さて、前回お知らせした平和ディスカッションについて報告をさせていただきたいと思います。私とエッド(イギリス人)は今回の責任者となったので、本当にたくさんの人に会い、第4回のディスカッションに向けて精一杯努力をしました。最終的に、2人の大

学教授(宗教的リーダーでもある)に小さなプレゼンテーションをしてもらうことにしました。トピックは、(1) イスラム教の平和プロセスにおける役割: 本当の平和をアチェにもたらしするためにはイスラム教をどうとらえ、使うべきか(ジェンダー問題も含む)、(2) 宗教的リーダーの平和プロセスへの役割と義務、です。そして、参加者は NGO 関係者にとどまらず、教師、イスラム学校の教師、モスクの責任者、そして私たちが以前住んでいた地元の住民を招待し、当日は約40名ほどが参加してとても活気のある、実りあるディスカッションを成功させることができました。この時から、私たちは地元の人々(NGO や政府関係者でなく)への平和教育が必要であると認識し、現在各地域への移動平和ディスカッションを計画しています。私たちの知り合いの地元 NGO のほとんどが、[バンダアチェにはたくさんのトレーニング

やディスカッションが行われているのに、それ以外の町や小さな町ではほとんどない。小さな町に住む人々は平和プロセスがどうなっているのかわからないし、平和そのものがよくわかっていない人がたくさんあるのでそういった遠隔地域での平和教育は重視されるべきであるし、必要なのだ。]と私たちにはなしたことが大きなきっかけです。私は、こういったプログラムは草の根活動の PBI だからできることだと思います。そして現在、平和教育チームのボランティアたちが中心となって、ビルン(Bireun) で第一回の遠隔地域ディスカッションをしようと計画しています。地元 NGO と協力してこのディスカッションやもっと多くのディスカッションを実現していければと願っています。



▲第4回平和ディスカッションの風景①

2月15日から約2週間、アチェチームのメンバー2名が中心となり、ピーディー(Pidie)で Alternative Violence Project (AVP)という非暴力のトレーニングを2回開催しました。地元の NGO と協力して、地元の人々が今後も PBI の助けなしに開催で

きるようにトレーニングしながら(Training of Trainers (TOT))、一般の参加者に非暴力とは何か、暴力とは何か、そして暴力のない日々を送るにはどうすればいいのかを参加者全員で考え、学びました。私も2月26日から3日間、AVP トレーニングに参加しましたが、とてもいい印象を受けましたし、とても意味のあるトレーニングだと感じました。知らず知らずのうちに犯している口頭あるいは身体的な暴力を見つめなおし、次の世代へ特に今、暴力で物事を解決している子供たちやそういった子供たちに接している先生に伝えていく価値があると思います。

3月中旬に、また新しいボランティアが平和教育チームに加わりました。カリマンタンのバリックパパン出身の女性です。今現在、平和教育チームは3名だけですので、もう少し多くのボランティアが加わり、いい平和教育プログラムを実現してくれるよう願っています。

さて、私は実は3月21日をもって、1年間の PBI との契約を終えました。しかし、現在 PBI がボランティア不足であること、私がアチェチームに貢献できることがまだまだたくさんあることそして私自身もう少し PBI のボランティアとしてアチェでかつやくしたいことから、契約を2-3ヶ月延長することにしました。私の活動を支援してくださっている皆様、もう少しご支援のほどをよろしくお願いします。





第4回平和ディスカッションの風景②

2006年4月13日 PBI

## 「日本のお気に入りの植民地 沖縄から ①」

NPJ 理事 城間悠子

非暴力平和隊・日本のニューズレターをご覧の皆さん、こんにちは。

### 自己紹介

私は城間悠子という。一応、NPJ 理事会のメンバーだが、ほとんど活動らしい活動をしていない。

今年3月に立命館大学国際関係学部を卒業した。4月からある沖縄の企業で働いている。これまで大学生活を送った京都を離れ、拠点を沖縄に戻した。

つまり、私の生まれと育ちは沖縄だ。ご存知のとおり、日本に対して面積約0.6%、人口約1%の沖縄に日本の米軍専用施設の約75%が集中している。耳にたこができるほど聞かされてきたが、一向に改善されていないからまた書かざるをえない。

実家からは米軍基地のほうが、通った小学校や最寄りのバス停より近い。

加えるなら、沖縄島のある村の出身だが、あえて名前は出したくない。「観光」観光客だけでなく、「運動」観光客にもうんざりしているからだ。村のおよそ半分も基地が占め

る。沖縄戦の時に「集団強制死」が起きたチビチリガマや、大田昌秀沖縄県政の時に代理署名拒否で注目された「象のオリ」(楚辺通信所)があるところと言えば、わかる人はわかるかもしれない。

### “ウチナンチュ”であること

自分自身をウチナンチュ(沖縄人)であると認識している。土下座されてお願いされても、お金もらっても、日本人なんかになってあげないと心の隅で思っている。これを単なる地域のエゴで片付けられては少々困る。

なぜなら、日本と沖縄では交わりこそしても、背負う歴史が異なるからだ。何より立場が違うと考えている。沖縄は日本の都合で「日本」になったり、「沖縄」あるいは「琉球」になったりしてきた。沖縄人が努力を重ねてご立派な日本人の仲間入りを果たしたかと思えば、野蛮で劣った琉球民族になったりする。その使い分け方は実に見事といえる。再びまるでトカゲの尻尾のように切り捨てられることがあっても私は驚かない。ここは

世替りの激しい地域である。私の子や孫が生きる時代に沖縄が必ずしも日本であるとは思っていない。

日本本土への同化の荒波が押し寄せなければ、こんなに強くアイデンティティを意識することはなかっただろう。そういう意味では感謝でもしたいくらいだ。

もう少しでしゃばって言うなら、私は日本を大いに「利用」して、沖縄は沖縄独自の道を歩むべきという考え方の持ち主だ。ただそれは沖縄人に対して述べることだ。日本の皆様には、一刻も早く米軍基地も自衛隊基地もお持ち帰り頂くだけである。独立しろ、独立できないだの、どれもなかなか余計なお世話に聞こえてならない。

### 日本帰りの「帰国子女」

沖縄のどの風景を切り取っても絵になると言うのは、自称・沖縄病の沖縄かぶれの日本人のせりふ。どこを取っても問題が潜んでいるとは日本留学帰りのわたしのせりふだ。

また軍事基地中心の異常な日常に慣れてしまう前に、今の感性を鈍らせたくはない。おかしいことは山積みだ。

基地のある風景は変わらず、大きな顔をしてどーんと居座っている。誇らしげにはためく2つの国旗が私の機嫌を損ねてくれる。

一方で、それ以外は開発の大嵐だ。聞いたことも見たこともなかったホテルが並ぶ。蛍がいた小道に空港行きの道路を建設している。慣れ親しんだ町並みは立ち退かれ、振興策で防衛施設庁の施設ができる。どこもかしこも開発ラッシュだ。ますます私は不愉快になっていく。「ちゅら島・沖縄」なんてイメージの世界にしか存在しない。沖縄の豊かな

自然とやらが食われているという表現がぴったりくる気がする。

### 「合意」の姿をした醜いもの

日米「合意」、政府と名護市の新沿岸案「合意」という形で醜いものが露呈されている。

沖縄県民を最終的には理解させる、説得できるという傲慢な政治家に、そういった範囲内でしか報道しない全国メディアにまたかと気分が悪くなる。

基地の機能強化を負担軽減というベールで包む。日本は国の借金がなんだかんだといながら、この類のお金には惜しまないようだ。

沖縄の人間を何回抗議集会に駆り立てたら気が済むのだろうか。いまの沖縄の事態はトドメをさされているのではないかと感じる。

私は「合意」していない。多数の沖縄県民も「合意」していないだろう。沖縄戦で死んでいった者も「合意」できないと思う。



▲嘉手納基地 【フェンスに沿って目隠し用に木が植えられている。この木はキョウチクトウ（狭竹桃）で、夏ごろになるとピンク色の花が咲いてきれいだが、毒を持っている。】

飛行ルートでも、騒音でも、経済振興でも、環境破壊の問題だけでもない。沖縄の歴史で最も重要な局面にきていると感じ

る。基地被害に悩まされる人に「基地を造って」とさせる残酷さに、息が詰まりそうだ。

沖縄人同士で対立させながら、適度にガス抜きもしながら、結果として本当にうまくコントロールされているなど実感する。

### 「日本のお気に入りの植民地・沖縄」

なぜこのタイトルをつけたのか。察しのいい人はもうわかるはずだ。沖縄人の尊厳がないからだ。

奪われ人は尊厳を取り返さなければいけないし、奪った人はお返し頂きたいと思う。

この地が日本とアメリカの植民地と思い

たくない自分がいたのは事実だが、目に前でくり広げられるこの屈辱を植民地主義以外でなんといえればいいのかわからない。

奴隷は自らを奴隷と気づかないから、奴隷でいられるのだそうだ。それならば、植民者も気づかない(あるいは気づかないふりをする)から植民者でいられるのだろうか。未来をいい方向に変えていきたい。

これからしばらくの間、“日本のお気に入りの植民地”である沖縄から何かしら便りを書かせて頂くことになった。これは読む人次第で、沖縄からの「雑音」になるかもしれないし、「声」にもなるかもしれない。駄文にお付き合い頂ければ、非常に幸いである。

では、またお会いしましょう。

## 「クリスチャン・ピースメーカー・チーム解放」

イラクで去年の11月末に拘束されたクリスチャン・ピースメーカー・チーム(CPT)のメンバーが解放されました。残念ながら拘束された4人のうちの1人、トム・フォックスさんは3月9日に遺体として発見されましたが、他の3人は3月24日に無事解放されました。

ともに紛争地での平和構築に取り組む仲間として、トムさんの死を悼むとともに、3人の帰還を喜びたいと思います。以下、NPから出された解放を知らせる配信の抜粋です。

NPの友人たちへ

イラクの3人のCPTメンバーが、一発の銃声も聞くことなく無事に解放されました！

イラクでほぼ四ヶ月にわたって拘束されていたイギリス人と二人のカナダ人の平和活動家が、多国籍軍の作戦により解放された。

ロンドン北西部出身のノーマン・ケンバーさん(74歳)、ジェームズ・ロネイさん(41歳)、そしてハーミート・シン・ソーデンさん(32歳)は、バグダッドで昨年11月に捉えられた4人のうちの3人である。

殺害されたアメリカ人のトム・フォックスさんの遺体は2週間前にバグダッドで発見されている。

ケンバーさんの家族は、文書を通じてケンバーさんが捕らわれた後に「こんなにも多くの方から」頂いた全ての支援に大変感謝している、と伝えた。「私達は彼を解放するために一生懸命働いて頂いた全ての方に感謝したい」とも述べた。

「今朝、私達の心は喜びで満ちています」とCPTのコーディネーターのドグ・プリトチャードは語った。「私達は一丸となって、彼らがバグダッドで誘拐されてから、不確実な

状況、希望、恐れ、悲しみ、そして今は喜びを経験してきました。」

ストロー外相はケンバーさんは現在、厳重な警戒態勢の中にあるバグダッドのグリーンゾーンの中にいると明かした。「ノーマン・ケンバーさん、彼の家族、他に拘束されていたカナダ人と彼らの家族の直面していたこのひどい困難がハッピーエンドを迎えることが出来たのは大変嬉しいことだ」とも語った。

ケンバーさんの40年来の友人である聖職者のアラン・ベテリッジさんは、BBCの生中継で次のように語った：「大変すばらしく、数週間前にトム・フォックスさんが殺害された後ただだけに予想していなかったニュースだ。私達は、全員殺害されてしまうのではないかと危惧していた所だった」

イギリスのトニー・ブレア首相は大変素晴らしいニュースであり、とくに解放されたメンバー及びその家族のために本当によい知らせだと語った。彼はまた、バグダッドから20マイル(約32キロ)北にあるミシャーダで行われた救出作戦に参加した全ての人に感謝の意を表した。

ストロー外相は作戦中、銃の使用が全く無かったことを伝えた。また、今回の作戦は「何週間にもわたってのイラクの駐留軍、連合軍職員、そして多くの民間人による、細心の注意を払っての努力」のたまものである、と述べた。

ジョン・リード国防相は救出作戦は「イギリス軍が先導する形」で行われ、有志連合に参加する数多くの国が携わっていたと述べた。「作戦は、ある意味で少し時間がかかった。今朝の5時ぐらいに終了した」とも語った。

リード国防相はさらに、「ノーマン・ケンバーと彼の同僚を無事確保できた事実は彼らの家族にとって喜ばしいことであり、彼らの果たした役割は英軍にとって誇りに思っよいことである。英国にとっても、彼らが今回またしても勇敢に活躍したことは誇りに思ふべき事実だ」と語った。

CPTのプリトチャードさんは記者会見の中で、救出作戦が行われた際、誘拐犯は誰もその場にいなかったと聞いている、と語った。

4人は、昨年11月26日にそれまで知ら

れていなかった「正義の剣旅団」と名乗るグループに誘拐された。グループは、アメリカとイラクの政権が全てのイラク人の囚人を解放するという彼らの要求に従わない場合、4人を殺害するという声明を出していた。

54歳のフォックスさんの遺体は、3月9日バグダッドのマンスール地区で発見された。遺体からは、フォックスさんが殺害される前に殴られていた証拠が発見された。

解放後の声明の中で、ストロー外相は「最後に、一つだけ大変悲しい事がある。人質とされた4人の内、アメリカ人のフォックスさんが殺害されてしまったのは全ての人にとって大変な悲しみである」と語った。

平和を願って

デビッド・ハートソー (翻訳：中原隆伸)

.....

## 非暴力平和隊・日本第4回総会 議事録

●日時： 2006年3月26日(日)17時～19時 東京、文京シビックセンター

●出席： 正会員66名中、出席13名、委任状提出18名計31名で、規約第20条の定足数（正会員の1/3以上）に達し総会成立。

●議案：

(1) 2005年度の主な事業・活動報告

(報告：大畑)

1. 月例会開催(毎月)

2. ニューズレター隔月発行——第8号

(05年5月)～第12号(06年2月)

### 3. 非暴力連続講座

(ピースネットと共催)

10人から30人弱の参加を得て、下記のとおり開催した

第9回 4月 「ガンジーの非暴力：生活の現場からの社会改革」片山佳代子（『ガンジー 自立の思想』翻訳者）

第10回 5月 「基地の街ヨコスカでの反戦平和運動の経験から」新倉裕史（非核市民宣言運動・ヨコスカ）

第11回 6月 「世界の平和NGOはいま——GPPACって何？」 君島（立命館大学教員）

第12回 7月 「非暴力介入の実践」清末愛砂（元ISM） 大畑 豊（元PBI）

8月 参加者交流会

第13回 9月 非暴力の経済学1 「貧困の構図」北沢洋子（国際問題評論家）

第14回 10月 非暴力の経済学2 「ほっとけない世界のまずしさ」田中徹二（オルタモンド事務局長）

第15回 11月 「市民運動における非暴力」阿木幸男

特別編 11月 スワラジ学園訪問「ガンジー思想に基づいた自立を目指して」  
寛次郎（スワラジ学園 学園長／茨城県八郷町）

第16回 12月 「ジェンダーフリーバッシングはなぜ生じるか？ 憲法改正論からみえてくるもの」 中里見博（福島大学助教授）

2006年 1月 参加者交流会

第17回 2月 「紛争を超越する」 奥本京子（トランセンド研究会事務局長）

第18回 3月 「スリランカでの非暴力介入の到達点と今後への課題」 大島みどり（元NPSSL）

第19回 4月 「ガンジー思想をひきつぐ——私の出会ったガンディアンたち」長弘毅（日印サルボダヤ交友会・会長、元・富山国際大学教授）】

### 4. その他の活動

●スリランカ復興開発NGOネットワーク参加（毎月）

●スリランカ研究フォーラム参加（4月）

●京都で理事会及び関西会員集会を開催（6月）

●NP国際理事会 —— 君島が参加（8月）

●福島・茨城学習会・説明会・イベント参加——

●武力紛争予防のためのグローバル・パートナーシップ（GPPAC）国連会議に君島参加（7月）

●スリランカ・フェスティバル参加（10月、於：代々木公園、主催：スリランカ大使館）

●スリランカ選挙監視（11月、小林善樹、大橋祐治が参加）、国際非暴力抵抗会議（清末参加）、パレスチナ選挙監視（2006年1

月、中原隆伸、大橋祐治が参加)

●立命館大学 「不戦の集い」 協力 (12月)

●大島みどり帰国報告会 (06年1月)

## (2) 2006年度活動方針・計画

### 1. NPJのNPグローバル活動への積極的参画

① 2005年8月の国際理事会でメンバー団体の積極的な参画が要請され、NPJとして次のような参画を行う。

阿木：国際事務局でトレーナー登録

大橋：プログラム委員会、ファンド委員会にオブザーバー参加

岡本：広島駐在の東アジア・太平洋地域オフィス・コーディネーター

② 非暴力平和隊・韓国 (Nonviolent Peaceforce Korea) との交流を行い、東アジア地域会議への展開の格とする。

2007年初めに3年度総会を開くことになっているが、その前に地域会議を開くよう要請されている。アジア・オセアニアでは実現が困難と思われるので上記②により、日韓中核にオーストラリア、フィリッピンなどを含めた地域会議開催を目標としたい。④項参照。

③ 2007年3月1日-4日、または3月8日-11日にケニアのナイロビで開催される3年度総会に備えた活動を行う。

④ 東アジア地域会議 (朝鮮半島、日本、台湾、香港、フィリッピン、ベトナム、オーストラリア、ニュージーランド等) を2006年

内に開催する。

### 2. その他の活動

① 非暴力連続講座の拡充  
従来どおり月一回開催とするが、最短6ヶ月のプログラムの事前準備、外部講師の謝礼の増額 (1万円→2万円)、パンフレット更新など講座の充実を図る。

② さまざまな運動に名を連ね、参加していく。

### 3. 理事の役割分担の決定・確認を行った。 (カッコは理事でない会員)

事務局	——安藤、大畑
メーリングリスト、ウェブサイト管理	——浅見、(鳥山)
ニュースレター編集	——中里見、(勝田— レイアウト担当)
名簿・会費管理	——大畑
月例会	——安藤
翻訳チーム	——小林、大橋、中原
講演、講習会講師	——君島、鞍田、清 末、奥本、大畑、大島
会計	——青木
資金調達	——大橋
非暴力連続講座	——青山、大畑、大島

### 4. パンフレットの新規作成

非暴力平和隊・日本の活動を分かりやすくするためにパンフレットを全面的に改訂する。

5. ニューズレター編集業務を理事の分担で行う。

(3) 2005年度決算

末尾、資料1の決算報告書を了承した。年度中期で収支に不安が生じ、2005年8月より専従者に代わり理事がさまざまな業務を分担することになった。幸いにして6月、12月のカンパ収入に支えられ、十分な繰越剰余金を残して決算をすることができた。

(4) 2006年度予算

末尾、資料2の予算案を了承した。(2) 2006年度活動方針・計画で述べられている通り、当該年度は内外共に非暴力平和隊・日本の活動を積極的に展開する計画であり、これらの活動資金を織り込んだ予算となった。そのためには、現会員の継続、新規会員獲得並びに昨年同様の6月、12月のカンパ集めに尽力を尽くす必要がある。

(5) 人事

1. 川端国世理事が業務多忙のため理事辞任の申し入れがあり、了承された。
2. 鞍田東監事より、監事辞任の申し出があったが、後任が見つかるまで留任する。

以上で定刻19時に総会は終了した。

【添付資料】

資料1. 2005年度決算報告

資料2. 2006年度予算

その他資料；

A) 会員数報告

2006年3月末現在

正会員 67人 (学生7人、会費滞納20人)

賛助会員 107人 (学生5人、会費滞納34人)

団体会員 7団体 (うち会費滞納2団体)

新会員 33人 (うち正会員7人)

B) アジア地域MO

オセアニア 2カ国(オーストラリア, ニュージーランド), 3団体

東北アジア 2カ国(韓国, 日本)6団体,

東南アジア 4カ国(フィリピン, カンボジア, タイ, インドネシア), 7団体

南アジア 4カ国(インド, パキスタン, バングラデシュ, ビルマ), 9団体

・全MO数

国際	8
アフリカ	8
アジア・太平洋	25
中東	7
EU	19
中南米	9
北米	16

計 92



\*\*\*\*\* 今後の予定 \*\*\*\*\*

## 月例会

日時：5月17日(水) 18:00～

場所：NPJ事務所 電話 080-5520-3077

三田線白山駅下車A1出口より徒歩2分

## 非暴力連続講座・特別編（合宿）

### ～葉祥明美術館訪問&横須賀月例デモ参加～

期日：5月27(土)～28日(日)北鎌倉・横須賀（詳細はご連絡ください）

ぐる「ヨコスカ平和船団」のボート乗船の企画も用意します。くわしくはお問い合わせ下さい。

5月の非暴力連続講座ですが、連休などもあり講座はお休みして、昨年と同様に特別編として、5月27日～28日に交流合宿も兼ねて行いたいと思います。

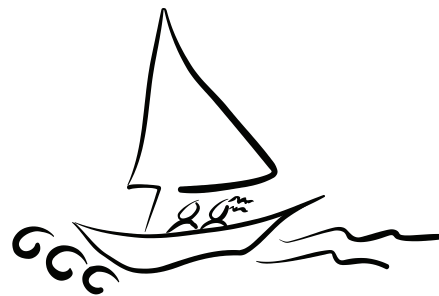
また6月以降の講座については現在準備中ですが、心機一転のスタートとして名称を「希望のための非暴力セミナー」と変えて、年内の長期予定を組んで準備していきたいと考えています。

27日は神奈川県北鎌倉にある平和と癒しの絵がたくさん展示されている葉祥明美術館を訪問します。葉祥明さんは「地雷ではなく花を下さい」の絵本を描いた画家です。

どうかこれから企画にご期待を。そしてぜひお知り合いをお誘い合わせの上ご参加下さい。（青山 正）

28日は横須賀月例デモ参加を考えています。

横須賀は昨年も行きましたが、米兵による暴行事件などが相次ぐ中、原子力空母母港問題で揺れており、また東京などのデモと違って地域に根付いた歌声中心のデモからも学ぶべき点も多いと思います。どちらか1日だけ、あるいはご家族連れでの参加も歓迎ですので、参加希望の方は申し出て下さい。



宿泊は鎌倉周辺を予定していますので、時間があれば寺院散策なども考えたいと思います。また希望者がいれば昨年に行った横須賀の基地をめ

## 会 員 募 集

- 非暴力平和隊の理念と活動に賛同・支援して下さる個人および団体を会員として募集しています。入会のお申し込みは、郵便振替、銀行振込、非暴力平和隊・日本ウェブサイトの「入会申し込みフォーム」をご利用下さいますようお願いいたします。

### ● 正会員（議決権あり）

- ・ 一般個人：1万円
- ・ 学生個人：3千円
- \* 団体は正会員にはなれません。

### ● 賛助会員（議決権なし）

- ・ 一般個人：5千円（1口）
- ・ 学生個人：2千円（1口）
- ・ 団体：1万円（1口）

- 郵便振替：00110 - 0 - 462182 加入者名：NPJ

\* 通信欄に会員の種類を(賛助会員の場合は口数も)ご明記ください。例：賛助個人1口

- 銀行振込：三井住友銀行 白山支店 普通 6622651 口座名義：NPJ 代表 大畑豊

\* 銀行振込をご利用の場合は、お手数ですが電話・ファックス・メールのいずれかを通じて入会希望の旨、NPJ事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。

- ウェブサイトからのお申し込み：<http://www5f.biglobe.ne.jp/~npj/nyukai.html>

## ▲◆●◎◉◊◻◼◽◾◿◸◹◺◻◼◽◾◿◸◹◺ 非暴力平和隊・日本 役員 ◻◼◽◾◿◸◹◺▲

共同代表：君島東彦（立命館大学国際関係学部教授、NP 国際理事）  
大畑豊（元国際平和旅団（PBI）メンバー）

事務局長：安藤博（東海大学平和戦略国際研究所教授）

理事：青木護（弁護士、日本国際法律家協会）、青山正（ピースネット・市民平和基金代表）、阿木幸男（成蹊大講師、カンボジア教育支援基金代表）、浅見靖仁（一橋大学教授）、大島みどり（元非暴力平和隊フィールドチームメンバー）、大橋祐治（平和を愛する市民）、大畑豊、岡本三夫（広島修道大学名誉教授、第九条の会ヒロシマ代表）、奥本京子（大阪女学院大学助教授、トランセンド(平和的手段による紛争の転換)研究会事務局)、君島東彦、清未愛砂（大阪大学大学院国際公共政策研究科助手）、小林善樹（「憲法9条の会・関西」会員）、城間悠子（会社員）、高井真（会社員）、中里見博（福島大学助教授）、吉岡達也（ピースボート共同代表）

監事：鞍田東（元会社役員、浄土真宗僧侶）

---

### 非暴力平和隊(NP, Nonviolent Peaceforce)とは……

地域紛争の非暴力的解決を実践するために活動している国際 NGO で、非暴力平和隊・日本(NPJ)はその日本グループです。

これまで世界中の平和活動家たちが小規模な非暴力的介入について経験を積み、功を収めて来ました。NPはこれを大規模に発展させるために2002年に創設されました。非暴力・非武装による紛争解決が「理想主義」でも「理想主義」でもなく、いちばん「現実的」であることを実践で示していきます。

NPは、地元の非暴力運動体・平和組織と協力し、紛争地に国際的なチームを派遣、護衛的同行や国際的プレゼンス等によって、地元活動家等に対する脅迫、妨害等を軽減させ、地域紛争が非暴力的に地元の人によって解決できるよう、環境づくりをすることを目的としています。

NPは2003年9月からスリランカでの活動を開始し、現在16カ国から25人のメンバーを派遣し活動しています。

